



精進物語  
下



續 都の染の系

檜梁准山領選

五并句冬之部

かち川や雀もトコトコ友午子

葛三

志かまきとくいと降しあふおまを乳

ふ呂根やとく雪ハ身とく見雪をわさ

あふ富ハとく系をあふとあまを

菓兆

あふ春のけ洋あふりく居も十返



雪の降旅路可ぬ  
巢北

能くもつらひ石く川之神は月

鶯の糞くく色もかきゆか  
成美

昔空のふくも阿婆はくく色も

十も揚や林やゆまの降まも

れ海の袖もかきくりや空の便  
長智

もか川雪も押まも流まも

あまじのかくもく層もく存の雪

かくく柳も色りり亦も也堂

小夜子もあも也層の風見  
保吉

會津山中

人よく雪も巢依ももく白  
曉臺

山の雪色も構も見も草も  
樗堂

芭蕉公羽肖像写眼

眼も写も流も紅葉も雨も降  
蝶美

病中

冬も丸け空也の上瘦も然も  
白雄

ふもりもて二も雪もり雨相も  
未沢七人  
又居

千石墨の白ひあやうしり来りり

モカミ七人 龜年

見まゝの雪〜後で氷〜冬への心

長安

けまじり某世枯くもあまのり危

酒田 河道

松尾の依の柳かまろりりり

枕更

出りたりぬるくひや〜雲の杜若

大ニ

月のをひ枝さり落るあのをまぬ

カメ田 和順

何れ道もぬをちまゆ物 枯芭

米沢 雄島

日甚くす〜月さり〜魚〜何れも代

二井言 久河

才の〜さき〜色め月いり

旭山

妻中々や日おをぬもむねの甘蔭

白石 宇工

指替〜後〜甲斐のり後不二

米沢 十竹

降雪の花〜もあまゆ〜養の袖

米沢 桂後

草のまゆや月もか〜おそ〜おれの声

画堂

山系むや〜精もさ〜日のお白ふ

表あ

十月中旬家を焼くのみ景且

二か〜のまも板の〜まふの郷

江戸 麦洲

お〜きの二おけま〜吹流る風

護物

あ〜〜〜野守〜橋のまを走り

蕉る

人無かくて海探がーあく千尋

江ノ 君委

るかこころくわー繩子の行時ふ

枕生

鐘の聲をききーとふ戸口の風

幸雄

船お初所やーと色のみ波口

九朴

鮫の面みくーとふもて海より

道良

時ふ余やー著も船縁をーもいお

とるー人もかふあきかき尾を

冬の月桂のやーと見ゆふく

きくーおーと風くありぬ新橋

日居

こころのやーおの果たりぬの海

武員 五十二

ふるふの尾ハ 證ーもー草かろー

柳好

上野より

黄ももすーめもきやて若の寺

上毛 一様

寒月やー仏の虚のこえすしめし

魏身

楳のやの扉のききやー杉の宿

志盛

ふんと笑お海のハ持くは海りも

川二

白川の雲平おらく海走丸

信員 白富

あや白ーおのー友をききすめ

坂道

四方のきりのやほるや 三上江呂 鳥頂

志のくちや ちんちん ちんちん 魚の骨 京 社草

野の苗を埋む木の葉や きののた 尾呂 足次

行くくさくさのこころみる 花のふり 三呂 大巢

星をまをひるやもさる 一るの鈴 肥前 身池

この経る時をさる 舞真如堂 大坂 ちめ

何よりも哀たや みるあもり 河内 井眉

行くや 梅ふのさる 菴の健 未紀 糸

大雪くさふさふさや 糸の糸

山雀の鳴き声 枯野うれ 下サ 惹峰

梅の裾 かくさる 花のふり ムツ 松

山道く 何れを思ふや ぬくあもり 乙二

松前より富嶺 早ハ瀬を越ふ

紅葉やさる 花の香かきり

能くハ言サ かせり 米沢 曉花

母の戸や 子さるの声の月ふもふ

ゆの月あつ 月さる ちんちん 志榮

経垣や 何れの声の障 清久 志久

千代子「重なる山也」江草ふちふ

米沢 赤白

紫戸もふ月もく通くまゝ室の成

龜眩

西原野もさやうの後ふ秋の色

桂路

君の代やもも庭もほの雪

志省

ものまひを風の吹きありを木之

盤山

松尾子「こぼれ曇りぬ秋走の風

樹得

霞ももささくささく落るさふふ

柳く

篠子「降」雪の声さく菴の形

文波

楳のやまの秋く啓や法蓮の

珂洲

分別の外の景色や草の色

山あ

楳もくや秋のささくの影もさ

日影の後の後やむ栂野代

栗岩

花も返さく日七は五七日平端も

泣車の振かきりな季もつ母面

古翠

ふら菴も安積の田も

曉花

山吹の先さくさくり降る花

杜橋

その雪もみも持し小松の風

白鳥

あ返も濡るささくまやさく母面

曉花

おろしや昔何々の山の夏 米沢 新体

松栎の蔭に暮れぬもあふすもの代

水のつらきをくくるともや野の写

見返をいぬ日あり古 曆 仙舟

夕影の蔭を車る木の葉ふらぬ

仙舟仏返福二句

月影も思ひえかき一をこつ後 仙舟男 寸呂

もつてゆく昔あふあを月返ふ 圭高

乾鮭や管さぬものとも見返ふ 井久

紫の戸や窓くくさるる一くきき

そあそめ入江に浮ぶ木葉ふらぬ 指月

海士うぶのその書影や雪しぬく 梨暁

りまのそふもよよとあふ柳あぬ うねと

乾鮭の歯あももよよ一年の暮 大逸

足えくもも流きりり冬への川 左掃

唐菅平し時面をさき 知ら柳 乙塙

時面くふ何かりふ何や草の宿 扇柳

菊等ハヤしおのぬきしとてえ 古翠



口切やまのそとく 祿り居る所

米沢 飛峯

森耳もも 歌くまをゆく 花のまふら

乙 韻

小里 うちまぬく 後さしゆく 外ぬ

雪の初や たり ちみおをを 待心

道彦

折るも 津一 ちり 初みちの 梅

梅のつゆも 通す ちり ちり ちり

碓嶺

ちり 仙をも 切家や 大るりの 墓系

上毛七人 蘿月

枯ふと ちり 草ま ちり ちり ちり

秋田 素来

山雀の手 通く ちり ちり ちり

かとり

雪の日や 施米の 大 けのり

峯梅

かくも ちり ちり ちり ちり ちり

池原

池魚 の 災 ちり ちり ちり

琵琶瓶の 雪降り ちり ちり ちり

乙 二

ちり 仙や ちり ちり ちり ちり

小坊主 ちり ちり ちり ちり ちり

高知の里

館色 ちり 見世の ちり ちり ちり

ちり ちり ちり ちり ちり ちり

道彦

春を待指の果やつくとも

碓嶺

身よりまゝ外より風かゝり御ち

米沢 疎竹

森く年の穴もさかすや冬の風

春二

山々の踏交仕舞ひし雪の降

七人 素人

とふゆて見てもあふり除衣の落

乙二

有明の月より春の中へまゝり

巢兆

手暮ぬ市より住あつぬ石溜

、

天津石二日の短きも限りのか

葛三

年の門より春はみえり春

士朗

夜居より内の果やあく性

碓嶺

朝日夕日のおる後多く頃

疎竹

玉鉾の市の中より春はま

嶺

櫻の扇を折ふ来

竹

既望ハ秋より近の雪はし

嶺

空の秋をふを一抔掃く

竹

きのふ見ればは遠く秋をきや

、

巖 嶺 雲 霧 多 事 情 一 々 々 々

二十五年海を見ぬとも位にさうり

定家の表の社家と身を下さ

推の實のさあさるるも月はしと

鬼の稲子通ふ沙汰さく

一貫の鈔を算ふやうにさうり

信西の信の人 睡ひささう

附の百子身を見あはれ 三崎越

まゝさう 薄さうて 柔白 作さ日

嶺

竹

嶺

竹

嶺

竹

嶺

竹

嶺

嶺 一 々 一 雲 霧 多 事 情 一 々 々 々

地之係くくの妻うさうくく

思ふさあさうの神楽見さうり

八重の從身方の名ハ忘ささう

朔日の夜のしりたり 結さうり

鏡の裏の画も志のふさう

紫陽をいさ世のさかあさうの寝さう

身あふさうり ちさうさう 結

さうのくの道をちさうさう昨日

竹

嶺

、

竹

嶺

竹

嶺

竹

嶺

松の耐る雪さうふ 土声

遺經も旧流し亭解きりふ

一人重岩へ降りふ麓六

あやしくとまもつ山峰の日

朴の産そのまの結ぶる牙

霞中を往き事て秋お情しん

切まつくふ珠散を簪ふ並ふ

さうくと白暮さるるの陣せー

楮のきふりふ風のそまきぬ

竹

嶺

竹

嶺

竹

嶺

嶺

竹

嶺

知り堀山のまき色の花 咲きす

いつは物さふ子り抱ふ春

竹

嶺

寄る旧兵の

人の世のまふまう乾く紅葉ふれ

月暮るまをいつくまの端

花櫃の先より秋を通やそ

夏使そのら旅探中ゆふ

黄鳥のほりくあまのねをた

確嶺

志葉

松

幸久

赤翠

所一本の柳春り逢ひつ

亀隠

教入の雲を延を空かりそ

山水

佛の花を赤 袴千 出

牙比

おと更子舩ハ七尾と昔計系

象牛

松千千と世の情 紗くま

桂路

暮る日もぬる日も思 路や

雀水

三島のみちり月を待身取

冬色

小サ秋さく際中を 狂をくま

樹得

一かちぬきくふきくく

寸呂

言りう歌のあきり皆叶ひ

大逸

招の苗を種ふ 初ふ

赤白

教もの道もくまぬ木曾の谷

吟歩

風年清きうハもゆふ 陽を

う福台

正月のそふ一のあふ 罪獄を

圭高

急の羽をくまぬ 年一 風を

久波

破ちふ浪を碑 千り 男ふ 頃

志者

僕の口もほくく 雀の 餌

吟峰

けいこくく 暮る 居春を 待 巻

狂摺

位子の母の齒染りかろし

牡丹

板妻の釘の浮くふちお解ふ

浮山

舌鳥のおまじ白汁うらま

沙香

葉の根をかき手えり月を成

扇柳

二人の口をとりしをさし

柳史

子母もあそびて六位を過す母

七路

むくくと傾くくちんしのむ

甘丸

山より海の色もさし東路や

李翠

又波小結ひし菴了悔は

索律

飛鳥の森を紅衣のまゆりやふ

鳥左

後章しし橋を往くは

白吏

小笠ふく凡も後しむも

曉花

色名三月のまきを調ふ

左耕

乙二うまわくまあまをまひ  
しも昔りありまひ今年あ  
國に再知を申す

中羽り居るまのくま吉原中

雄嶺

あけぬりし写はるの松子

忍雲

炮 砲くの上へ子 踏り、水邊へ

嶺

雲の中 遠き方の餅をまぐ

雲

まき山の色平、らきき、子 射の月

嶺

延り、阿中、子 舟の 衝 寒

雲

手 杖の 藍の 白の平、風、雪、子

嶺

尼 尔、あ、子、子、う、か、方、の、中、を、焚

雲

眼、り、こ、え、ぬ、情、を、出、し、け、の、声

嶺

夏、車、ま、の、ま、憂、と、ま、子

雲

曳、細、ふ、赤、木、子、浪、も、ま、の、ふ、と、ま

、

籠 ぼへ、ぬ、ふ、雪、も、冷、つ、く

嶺

粟 稗、も、草、み、お、ら、け、と、月、出、て

雲

金 沢、の、道、の、う、の、有、か、と、世、平、

嶺

金 沢、の、道、を、教、み、と、ま、き、と、り

雲

暮 暮、ふ、を、あ、の、袂、中、と、ま

嶺

長 松、の、ま、ま、あ、ま、は、花、の、陰

雲

木 樹、の、土、も、春、多、し、と、あ、子

嶺

芥子の子を信つての子をねねる風

確嶺

打目のまがぬ麻子小食

不找

黄鳥のむろくゆり散落す

春赤中々きく此二日の月

嶺

種おそく水の秋をさかぬ着る

記の猿のまきしるぬ福ふ

找

降るのまほきハまのそくく

ふやふ鏡子船のふふ

找

志らくくハ生けの星の松

嶺

電掃出さる塩 休日

找

まきしる福を買ふ行てる戻り

嶺

秋をさかぬ不破の記書し

找

一巻二巻くまき日下雁

市の飯屋の上書をすふ

嶺

鯉 けふ中々ぬかかまき福者

找

るねのほ子の流るる水

嶺

後 種くまきぬ花の信

找



古妻の志も草の春先

嶺

四時昆雜

香柳や一身はゆの人通

信及

氏曰

雀も餌ふつと也種葉の秋葉も

亀文

雁もくち草らり秋も月の声

是も秋も日の光や海も

可厚

花も似ぬ小勢くく山の家

相及

や血風

姐板の音も一葉も文も

豊之女

何そぬ返も柳ありと春後の日

秋田

巴陵

菜の日は春の光つと春の光り

ふ声

昼中の蔭ハ草の光りも

るり

子の名も春の光つと春の光り

文好

春の光も春の光つと春の光り

号水

春の光も春の光つと春の光り

仙臺

吉道

春の光も春の光つと春の光り

三醒

菜の光も春の光つと春の光り

野節

春の光も春の光つと春の光り

無名

世のなるま初風しそ能月秋 ムツ 竹二

あゝ草ふゆしめそきそし虫の色 ムツ かつ

黄なるの玉ふむ里や相替る 五十二 松年

雲あゝの溜りうゑそそ家揺る イセ 省吾

夏買子初ん牡丹のちふ日そり 五十二 瑞元

そそあそく松の下そそ有風そ イセ 涼居

陽あゆむ初の花もそそ イセ 秋泉

秋風の柳あふくや真如堂 イセ 清美

庭あそくそそ山の下そそ イセ 民時

山吹の流し見ふそそそあゝの雪 イセ 文貫

雲あそく相の本そそそそ イセ 晴亭

松風の音ハ音あそそ イセ 平明

庭前年経ふ松を好そ

照るのそそ夕影も光の春 イセ 感涼

そそ枯や西なるの尾そそ イセ 久思

あゝそそおさかり程の雨そそ イセ 左洲

十時菴

秋結んまのふそそ世の本そ イセ 確嶺

旅うつろふ身より後の墨田川

江戸 護物

古里一盃しりしりも草枕

碓嶺

風越をとりほく雪の野山あり

蕉雨

地巻の着日をかきしやけり子

掌笠

十六日木のぬてやあやふ写子哉

乙二

川風の宿 思ふや くら 左

静なるを画し見てる 一 福祭

二十一年の思をほく 三年の良夜

とあり月と家とをくふ路迄

附の百もわし交ねとてや 時多

葛三

氷はも目か交あはし 丘の松

身のはさみ敷を思ふや 墨田川

道彦

昔のきの指餅ふとあは 袴の節

泉兆

そつ雪や 実の清あゝの埋きし

形もあてし小松むきしや 写宿

狭 葉の月を委滞や 時々 宿

米沢 麻並

紫 葉をくや へ 届うぬむの上

ト之

三日月の影を 秋あし 一 丁の巻

芸智

日光

美代の本草も人もまじりて

未沢

忍雲

〜〜の流もはき

〜〜の流もはき

大系や大根喰の雪のくも

芦洲

精ちふ友平居ま子性うれ

左明

本枕の二河もあくそむの岩

菅元

草外もよそはるふむの主う柳

太楊

寺早や牡丹竹日の大施ふ意

、

頂子遊名半甲も子見〜春の夏

東海

梅さくやあを刻者の樹〜

盤山

苗云布草本平〜苗を村せ墨

、

多宿のま〜う梅を〜

美休

雪阿〜色む赤日日もあかりを

、

見ぬ先の空〜思ふや松の霜

才比

ありぬ〜声ほり丁の板を

士峯

鮎の淵の一辰多〜

松徑

有湖〜い〜なま〜

、

嶮峻り海の人ハ誰〜まの暮

米沢 杜宇

十古日おや 凡先く〜ま山の早

文董

す〜掃も世〜有さ海や 草の宿

司曉

寒〜月や 後ひよ〜家〜毛貝

素英

石化寮〜く〜心あのを 年若〜る風

秋 一海

土〜雪〜る〜意〜め〜り 新 朗

魯風

下京や 芥菜 畑の 中の 聲 既 ち

茶居

この 庭 毛 ね び 張 ぬ 草 中 々

兔水

炭 扱 々 毛 ほ ぶ ぬ 色 の 先 心

不我

江 中 々 の 心 志 々 降 や 々 々 の 心

もとの

妻 中 心 志 々 降 や 々 々 の 心

蓬石

降 乃 毛 々 々 色 々 々 ぬ り ぬ 搔

こ人

男 々 々 々 先 の 々 々 々 々 々 々 々 々

官製

煙 々 々 々 々 々 々 三 輪 の 々 々 々 々

精香

土 々 々 々 々 草 々 々 々 々 々 々 々 々

雄鳥

寂 々 々 の 心 志 々 種 々 々 々 々 々 々

々々々

江戸年々々

野草の 心 志 々 々 々 々 々 代 の 春

李翠

夏種をみまらむなり山宿

米沢

宇喬

藤籬の日も長くうきふく

田代

市販の袂も白ひ山椒の芽

素律

かき草や牛の背うねくゆの影

かゝ里

あま子と芦留はくもは月夜

琴利

ねの海と月退ひ山宿あり

松香

何多海ハ洋子と宿も秋のそと

虹山

甲子年の山宿もさるやとるの月

白石  
左呂

川りやみよふ春のまじり

江戸  
呉あ

ちふを盛柿の花も日の中

宿上

指月

まき近き春を重なる山宿

几丈

山宿の宿もさるやとるの月

几明

雀の跡ふたをいふの春のそと

文岳

崖戸り梅の春もさる月夜

子賢

秋のねやさるの宿の低く山宿

米沢

白史

ねねや冷くくゆふ天津木二

跡竹

ねのふくや麻の北達のまじり

乙負

白梅り別色もさるや山宿

柳々

草の根も秋はくも色を枯海寺

宋次 乙塙

杏ハ老ユキヲ鯨を重人ハ老テ老を  
信スルコトハ鯨を重ハ又

年木賣年木賣り汝の老買ん

飛出

何其もも動のくゆふ春日見

秋田 金三

おつもくやの上をもふくく秋の風

倉和

秋の性春の空の中も雲も

雀命

梨の花是もく風は阿くく

如測

黄鳥の老もあつりくく

川原

安宿の小もも秋の空もふり

奥良 芳吉

夕野の多くか茶もあぬ子のあ

多代女

芦の空もをくはる刻くあ

ツカロ 虚白

抱魚くくふきの回もや

萩 杵谷

花もかきく人の野もむ梅氏

江戸 菜場

何も鳥の何もいほりくく秋の物

曉何

垣もくく春もくく寺や

椿 幸雄

くく秋も咲くくあ空の海もかき

又貫

空浪もあもるも見ても春の海

芦菴

川曾やもく秋の空もかき

九朴

交信不聞きとてねむり門の雀

江戸 ちり

黄鳥の羽先まき二月の風

ちり

赤し路も人ふきけふ時 鳩

女 周来

一箇一葉の空をぬかぬあふり

夕一降きぬ花見衣るぬ程

胤山

蟻くまのつらさをけり茂るお

碩高

墨田川糸ねのありて花のたけ

左部

ころ雀の泊るころ 門田

鶯笠

草枕春あけや 虫の糸

世馬

あハ四輪中のあつハ風流の馬

日の雨麓のあつハ雨降ふ

碓嶺

襟ハ中くあつハ斗や浪のさゆ

護袖

月を何ぞや地震のあつハ茂るぬ

豊前 一宵

あふ高くかえく 平色ハあま

成美

紅羊や千代のちりりの浪上ノ浦

巢井

雪あつそいぐ度袖もと原の月

道彦

そのあまもくか一村を梅片ハあ

南部 和秀

春の雪そのあつハ舞の具えそ降

平角



三采の香子秋のとはふる山家哉

南部 耳杖

菊代の秋や中をまきとてよの光

林雀

花や燕と起さる梅の本もあは

珍平

友のちや花も書画のかり堅霞

東珞

浮床も人かこけりけりけり

寛兆

寂しくも嘆重くもあまをまは

常共 眠石

石梅や雪司る酒の身もあは

信長 雲山

碓の書も澄りり年一のく女

朱沢 雲牛

まよの月後世あふまはるあまの光

玉之

行里や後や不しき月の雲

涼歩

あま鳥の烟こけりおまの花

駒章

結も出さ月も流生の十あね

福丸

あま鳥のあま鳥色や目もあは

宇考

素堂叟の判詞や白雲や是非を解く人  
行是非の肉を出し是此是非の非を出し  
普天下の作者多し事をも思ふ事今羊  
己卯の秋葉月出羽のくあ、丹、卯を成て  
采決り止ふ事累日時あま、不ト叟の  
選集續の系も再興、又此時、何の系  
作者の句を拾ひあま、人の句をも撰る

徒はたの原と早くてもて樟平よき事  
是全経をて行を師とすふの心こ我  
行是洲の内も出は鳴呼非をん

あゝ花をふつら心の跡とあはし 碓嶺

教憂りかえりて嘆日を花の夏 碓嶺

蝶の舎年一 踏ふ草の戸 雄島

青海苔の白ひふさぎぬ春立て 嶺

人 呼ふ 声の 浪ふ 映ふ 島

今更く一月の初より深しき母 嶺

折るくもくむ 梔子の色 島

小径の鍵を新き返ふこ 嶺

恨も留りたりくく吹 島

来ん世より頂戸の海士とも扇まし 嶺

雲の道も交垣の何ぞ鳥 島

引かす詔の名跡の藤科意 嶺

月を降り懐中より紅 嶺

一昨日のきびの鳥ふ身を位て 島

大工の杖杵をばり僧達

嶺

時くいて流る院不尋の海

島

暮ふ万の舌き山の端

嶺

七種もあけぬ手梅の散出

島

飯くふ外ハ凡中のまゝふ

嶺

馬呂寺を跡あふむ約束平

李堆

船の日帳の合えぬ賢降

嶺

甬をふ運くし終をまつてやり

堆

母のあひ子のくく川四月

嶺

あかきく埃を流る苔の上

堆

河原の院のくあひをくくむ

嶺

くまのくハ月見ふ秋もさほくま

堆

元のまふと虫くまふちやふ

嶺

名物の梨を二つ平割るくく

嶺

アハハ篠弓の悪くくりゆき

堆

あかきくもの洞くけを波重初

嶺

附るも終くく雪の降平

堆

道まゝままふ何くくも志度ノ里

嶺

聖とてきふ日をさしぬ西窟

堆

まじりし二の石の客ハ立ちたり

嶺

まじりの雲の足えふ其不

堆

介ゆる雲もむの種中あし

嶺

安積の田中 不き枝はは

堆

咲辛夫く色行 畜の能くゆふ

飛岑

母子の草を鳥の餌ふはむ

柳之

杖筵の上も雛の春さる

雄嶺

風の音も凡の如くあふ

岑

ちく鹿の声ふる多し宵の月

柳

瓢の種をぬきおし西武

嶺

洛外をせ秋す 存ふ証 回り

岑

こころもくく 鐘をひきあふ

柳

鏡も埃の多や不国の戸す

嶺

黒髪山あそやなむりあふ

岑

忍冬の花も散る 雲あめあ

柳

僧もあつ子の名を隠す月

嶺

身一町の秋を去るる復まき

岑

雲の墨も流るゝ又心

柳

拵ふたふかきを返る走ら

嶺

程をいそぎ人をつら

岑

法佛の別を多く花の中

柳

冬の年お折れけし吹

嶺

但更の冬も一年の去る春

岑

縁をききおむ柴の戸

柳

五橋おいそぎ縁をけし

嶺

冬の旭々情くふ

岑

見ぬ急い加田の渚お

柳

邊事けも不線香の灰

嶺

山雀もあふ草ら枕も

岑

萩をいそぎ紫花を

柳

一村の夏各月も

嶺

林火を祭ふれをも

岑

大嶺層の山麓を

柳

海に映るをさふ仲立

嶺

行雲可旅のうらを引出色

岩

弥生もくくあゝ二十ハ日

折

采川岸の塵ももほふ掃ちきり

嶺

花の吹雪の肩こゆふ声

岩

賣あふる人形も世ふ何そと

折

妻の籠中をぬるの中宿

筆

追加

人ハ皆何をなす陽の影を春の雀

古聖

おのの身よかえりぬまきや泣くをる

言身も肉のつくまあり梅柳

松徑

柳を待ん柳見きりきたる仏の白

乙韻

親の笑み中しく病ぬけや梅椿

乙塙

やま候の足えきふり海の方

曉花

稚子ゆき山路の草ふ春動く

杏月

加一

テハ三井言

雪ふるやあけぬくむきそあく性

テハ二井宿

音羽女

山の井の庵中をくまの葉下り風

湯香女

花や初夜をききあせり花月

崎山

花のふい草やもよひのそく一統月

呉山

黄ひるをききいひ日もあやら焼る

文河

旅百里あけくもゆくきや須戸のを

牡丹

多彩の森やとすむ雪友の月

乙二

赤湯の里や

枯草やしもふ月日の眼やふふふ

雄嶺

出羽のくまき青を遠く

あけぬ根やかきこ酌奇一雪かきこ

雪あ日や篠の上やも松葉をふ

朱沢

後二

織を移衣やぬそのを月まふ

相馬

森を移し草も庭もねのき

梅亭

初春や鳥鴨をふり遊りは

一ノ関

世竹

かきもみはきくくそのり草の庵

ハコタテ

几隠

世あくと雀あめは目をまはる遠

信及

布席

衣くも思ひもあきき寝卵あか

何丸

馬魂ふるや若袖を舌の上 信及 呂吹

友山や月ハあつたの上を引 上及 體因

山寺の事や物ツつ返春さあ 秋田 芽丸

廣中へ心寄海ふをぬも旅の宿 秋田 仙風

あゝさハ口寄さまぬ月ねえ 眉長

雁の初を今寄ハるを不祐寄海邊 厄言

痛書あり見舟さあ若はつた 尋風

筆草み友のうとくやいつ 江戸 伯夫

木や草の風やあまをさして 伯夫

東山ハ病中梨子歌を好まぬハ

梨をむく隙ぬきぬハ袖の寄 應く

十月六日、金全仏の忌日や尚也ハ

公解忌も通るふ菴の六日や那

習境友の夏の浦子待し中 道長

苗さや田さの僧の衣 道長

此三句ハ病中の作也

出羽のくみ二井宿り也

見ふふく雪まあ 確嶺



病中

大切なる家の夕をほくくえ 李堆

菜の初人示はききもそ菜の秋 山水

草の初やきき芳野の春を待 志榮

月かきをふむ進志る梅のむ 意久

昼色の春了居まふ田あし 桂路

山の平をきり尾もまの初 亀崎

写のそ飛る鳥の赤日やまの初 赤白

辛夷さくも花不見えゆく春の際 雄島

一口平の旅のつらき法ありぬ 江戸米五

力の初や通ふらんあの中 東甫

腕の初やおとのとくあき五月 栄

去る家や二つも阿ぬ身の縁 珍田

秋もたや中くぬきもそ花 松人

押出して秋のこゆあや天川 東二

秋立や昨日のうらもろぬ 松才

月小くえ世のふや青田面 梅長

七夕や母のまハ秋の巻 二丘



